

「喜多方桐桜高等学校における工業教育の在り方と方向性」

～喜多方工業高校と喜多方商業高校の統合～
福島県立喜多方桐桜高等学校 教頭 富樫 実

1 はじめに

喜多方市は、福島県北西部に位置し人口は約 5.3 万人のラーメンや桐工芸品で有名な小都市である。その喜多方市には、県立高校が平成 21 年度には 5 校存在しており（普通 2 校、職業系 3 校）、地元中学生の人口減少傾向から、各校とも毎年の入学者選抜では定員枠の確保に苦慮している。そのような背景のもとに県立学校改革の一環として平成 22 年 4 月に喜多方工業高校と喜多方商業高校（1 学年 3 クラス）が統合し新しい専門高校として喜多方桐桜高校が開校した。

2 喜多方桐桜高校の紹介

(1) 学校の場所・規模

旧喜多方工業高校の校舎を使用する。

1 学年 6 学級 240 名

完成年度（24 年度）18 学級 720 名

(2) 学科編成

[工業]	機械科	(40名)
	電気・電子科	(40名)
	建設科	(40名)*
[商業]	エリアマネジメント科	(40名)*
	ビジネス実務科	(40名)
	情報システム科	(40名)

(3) 学校目標

- ①新しい時代を担うスペシャリストの育成を目指す。
- ②主体的に自分の進路実現を図る人材を育成する。

(4) 目標実現のためのコンセプト

①総合選択制

- ・学科を超えて一部の科目を選択することができる。
- ・2、3年生で2科目ずつ選択することができる。

②専門性の深化

- ・大学や企業との連携からより高度な知識や技術の習得を目指す。
- ・工業や商業に関する各種資格取得や検定試験の合格を目指す。

③地域との連携

- ・地元企業での職業体験実習を充実させ、職業観や勤労観を育成する。
- ・地域に情報を発信したり地域発展のための提案を行う。

(5) 各学科の特色

工業 《コース分けは2年生から》

【機械科】

- ・機械技術コース
「ものづくり」を通して、機械に関する基礎的・

基本的な知識と技術を習得させ、創造的な能力と積極的に取り組む人材を育成する。

・エネルギー技術コース

原動機に関する知識と技術を取得させ、省エネなどの新技術に主体的に対応できる能力と積極的に取り組む人材を育成する。

【電気・電子科】

・電気コース

電気技術全般の基本的な知識と技術を習得させ実際に活用できる人材を育成する。

・電子コース

電子技術と情報技術に関する基本的な知識や技術を習得させ実際に活用できる人材を育成する。

【建設科】*《福島県内初》

・土木コース

国土開発や都市計画に必要な測量の技術や施工技術などの知識を習得させ実践的な人材を育成する。

・建築コース

各種建築物の構造・デザインに関する設計方法や施工技術などの知識を習得させ実践的な人材を育成する。

商業

【エリアマネジメント科】*《全国初》

喜多方にある「食文化や伝統工芸」等を題材にした実践的な体験学習を通して、地域の良さを分析し、その分析結果から「まち育て」の提案をし地域産業の担い手となる人材を育成する。

【ビジネス実務科】

商業に関する基礎的・基本的な知識や技術を習得させるとともに、簿記関係に関する知識とコンピュータの高度な利用技術の習得により社会に貢献できる人材を育成する。

【情報システム科】

高度情報通信ネットワーク化の進展に対応できるようにシステム全体の設計・構築や管理・運営の技術を習得し情報処理技術者として情報化社会に対応できる人材を育成する。



3 喜多方桐桜高校における工業教育

(1) 基本方針

喜工高の校訓「勤労誠実」、喜商高の校訓「士魂商才」を継承して、「ものづくり」と「ビジネス」の基礎・基本を学び、地域に根ざした将来のスペシャリストを養成する専門高校とする。

(2) 実現するための方策（私案）

①工業・商業の専門性、独自性の確立

最も重要なことは、工業は「工業としての本分」をしっかりと見極め、これまでの基礎・基本的な学習内容から最先端技術に至るまでの学習を総合的に実践することに変わりはない。商業に関しても同様である。

②工業と商業の融合

【総合選択制の実施】

喜多方桐桜高校の特色のひとつは、総合選択制の中に《相互乗り入れ科目》を設定していることである。工業で学ぶ生徒が商業の科目を履修すること（2・3年次）が可能なカリキュラムである。

【蔵のまち再生事業への参加】

喜多方市内には約4200棟の蔵があり、貴重な観光資源となっている。しかし多くの蔵は老朽化が激しく、補修が必要であっても経済的や使用目的の面から補修が進まない現状である。そのような現状を打開すべく県建設業協会と喜多方市と喜多方桐桜高校など11団体が連携し再生事業のための検証実験を行うこととなった。市内にある「嶋新の三十八軒蔵」を舞台にエリアマネジメント科と建設科の生徒が蔵の補修工法についてワークショップを開いたり、チャレンジショップを開設したりする。

【製品から商品へ】

工業で行う「ものづくり」が商業で行うマネジメントを経て商品化へと繋がり、市場に流通するシステムが構築され地域ブランドとして確立される可能性もある。

【工業から商業へのプレゼンテーション】

商業で行うマネジメントを有効に活かすためには、工業からのプレゼン能力が重要である。「ものづくり」でどんなにすばらしい作品が出来ても、その作品の良さが商業のマネジメント担当者（生徒）に伝わらなければ商品化はできないことになる。工業で学ぶ生徒のコミュニケーション能力を育成することが「新しい時代を担うスペシャリストへの育成」に繋がると考えている。

(3) 今後の展望（年次計画：案）

STAGE① ~H21	【開校準備期】 ○統合の準備や調整 ○学校目標等の確認
STAGE② H22~H23	【開校2年間】 ○目標実現のコンセプトを検証 ○方向性の確認
STAGE③ H24	【初めての卒業生】 ○教育成果の検証 ○新たな課題の発見と解決策
STAGE④ H25~	【充実期】 ○検証に基づいた新たな学校像の確立 ○学校全体の活性化

(4) 教頭としての役割（工業教育という観点から）

校長が示す学校目標の実現に向けたビジョンにしたがい、学校全体を総合的かつ客観的に捉え各分掌が効果的に機能するようにコーディネートする。

①円滑な校務運営

- ・工業と商業の職員間連絡調整をより一層丁寧に行う。

②地域企業との連携重視

- ・「会津ものづくり人財育成事業」の成果を生かす方策とその自立化を図る。○「企業連携実習」等の継続

③中学校との連携重視

- ・中高生徒間の交流を積極的に行うことにより、中学生が次の学びの場として工業科を志願するような意識付けを図る。○生徒会、部活動、出前授業等

④「ものづくり」教育の充実

- ・「ものづくり」の成果を活用する場面を見いだす。
○製品・商品化、技術の提供など

⑤工業技術を地域へ還元

- ・生徒が工業を学び、身に付けた技術や技能、取得した資格を生かしたボランティア活動ができるように計画する。○高齢者住宅の訪問

4 おわりに

喜多方桐桜高校が開校して3ヵ月が経過した。統合後も様々な課題があり調整作業の毎日である。混沌とした状況は続くが、私達の想いは地域の方々から「統合して良い学校ができたね!」と理解していただけることである。さらには地域に根ざし、誰からも愛される高校を作り上げていくことが使命だと感じている。福島県内初の[建設科]と全国初の[エリアマネジメント科]など、斬新な学科編成であることから、工業と商業が併存する高校の特徴を最大限に生かした新しいスタイルの高校を創造していきたいと思っている。